第9回 活力ある学校づくり検討委員会	
平成29年10月5日（木）	資料3-1

「発達段階に応じた学びを行うために必要な規模」に関する意見

A 「授業や学習活動の面から」

	意　見	要点整理No.
ア	適正規模の基準を決めることは難しいが、望ましい規模を学習面や教員配置の面からも考えたい	A 12
イ	小規模な学校では先生が子どもと密になり細やかにみていただける	A 9
ウ	小規模校ではふれあいの中から学び取る機会が少ないのではないか	A 18
エ	小規模な学校では子どもが一人一役で責任を持って学んでいる	A 17
オ	少人数で学ぶよさと大人数で学ぶよさがある	A 11
カ	20から30人いる学級では、自発的で学習意欲あふれる姿勢が期待できる	A 19
キ	4人程度のグループでの議論の後、学級で発表し他者の意見を聞く学習が大事ではないか	A 15
ク	少人数では協働学習や共同作業に困難さがある	A 14
ケ	小規模校では教員の数も少なく、専門的な教員が少ない場合がある	A 13
コ	大規模校は先生が一人ひとりに向き合う時間が少ないのではないか	A 10
サ	音楽や体育は、ある程度の人数・集団が必要ではないか	A 16

B 「人間関係や教科外活動の面から」

シ	子どもたちが健全に成長するためには集団での学びが大事ではないか	B 34
ス	人間性等を育むための、好ましい人間関係づくりの力が育まれる集団環境が大事ではないか	B 25
セ	小規模校で年上の子が年下の子の面倒を見たりすることはメリットである	B 28
ソ	小規模校で大きな集団をつくれないことは子どもの成長の中でデメリットになる	B 29
タ	少人数の学級では、周囲を見ながら自分を評価する力を育むことができるか心配である	B 30
チ	小規模校では、保育園から中学校まで関わる人がほとんど同じであり、限界である	B 23
ツ	小規模校では、多くの人と関われるように、小中合同音楽会や異年齢交流等さまざまな工夫をし、活力ある学校づくりに努めているが、限界も感じる	B 24
テ	多感な思春期に入った子どもたちの集団の在り方はとても難しく、少なくとも小学校高学年以降は、学年に複数の学級が望ましい	B 26
ト	小規模な学校で学んだ子どもが大きな中学校へ行くことが、中1ギャップの一つになるのではないか	B 27
ナ	学年があがるにつれ、中学校・高校と大きな集団環境が大事ではないか	B 31
ニ	20から30人の学級では、自分と周囲の友人と、互いに学んでいる	B 32
ヌ	相互評価しながら自己評価することが大切になる	B 33
ネ	子どもが望む部活動ができるようにしたい	B 22

C 「学校経営・運営の面から」

ノ	子どもの多様性を育むため、大きな学校に子どもを集めることが望ましい	C 41
ハ	学級数が少ないと教員の数も少なくなり、学習保障が難しい（特に中学校）	C 39
ヒ	学級数が少ないと教員研修等の面で教育の質の保障が難しい	C 38
フ	小規模校では学校を牽引するミドル層の中核教員が少なく、学校運営に支障をきたしている	C 44
ヘ	財政面から、小規模校が増えることはある程度の歯止めが必要ではないか	C 40
ホ	小規模校にかける経費を減らし、他の小・中学校に割り振り、充実させる取組も必要ではないか	C 42
マ	中山間地の小・中学校では校外活動に関わる保護者の経費負担が大きい現状がある	C 43
ミ	PTA役員等の保護者負担も考える必要がある	C 37

F 「その他」

ム	小規模校の児童生徒や卒業生、教員は小規模校をどのように考えているのか	F 62
メ	小規模校の子どもの通学方法を考えることも重要ではないか	F 63